

Бежин Луг

Иван Сергеевич Тургенев

ビエージンの草原

——イワン・ツルゲーネフ原作 中山省二郎譯

【やぶちゃん注：これは

Иван Сергеевич Тургенев (Ivan Sergeevich Turgenev)

“ Записки охотника ” (Zapiski okhotnika)

イワン・セルゲーエヴィチ・ツルゲーネフ（一八一八年～一八八三年）の「獵人日記」（一八四七年～一八五一年に雑誌『同時代人』に発表後、一篇を加えて二十二篇が一八五二年に刊行されたが、後の七十年代に更に三篇が追加され、一八八〇年に決定版として全二十五篇となった）の中の

“ Бежин Луг ” (Bezhin lug)

の全訳である（一八五一年『同時代人』初出）。底本は昭和三一（一九五六）年角川書店刊の角川文庫のツルゲーネフ中山省二郎譯「獵人日記」の上巻の、平成二（一九九一）年再版本を用いた。一部の読み（底本のルビ）については私の判断で拗音化してある。巻末にある訳者注を作品末に示し（但し、文中にある注記号「*」はうるさいので省略した）、一部の私に気になった語についてのオリジナルな注も混在させた（記号で明確に区別した）。なお、[HTML 横書版](#)で本文中に入れた私の字注は読むには煩瑣なので一箇所を除いて除去した。表記に疑問を感じられた方はそちらを[ご覧](#)戴きたい。なお、一部判読不能の部分は、同テキストを用いたと思われる昭和一四（一九三九）年岩波書店刊の岩波文庫のツルゲーネフ中山省二郎譯「獵人日記」を参照した。【二〇〇八年七月五日】本PDF版については、変換ソフトの関係上、一部の正字が横転する。御了承願いたい。【二〇一四年十一月八日】

ビエージンの草原

幾日も天氣のつづいた時でなければ見られないやうな、七月のよく晴れた日であつた。朝早くから空は澄みきつてゐる。有明の光も火のやうに燃え立つのではなく、柔かな紅らみをみなぎらせてゐる。太陽も焦きつけるばかりの旱天ひでりの頃のやうに、火と燃えて暑苦しくはなく、また嵐の前によく見るやうな陰つた茜の色もなく、明るく、なつかしい輝きを放つて、細長い雲のかげからいそいそと浮きあがつて来て、爽かにかがやき、やがてまた薄むらさきの霧に没してしまふ。立ちのぼる雲の細かな上縁うはべりは小さな蛇のやうに閃き初めそる。その閃光かがやきは煉られた銀の閃光かがやきのやうだ……。するとまた揺らめく光線ひかりが迸る。——愉しげに、おごそかに、舞ひあがるかのやうに、大どかな太陽が昇つて来る。正午ひるごろになると、いつもやはらかな白い霽へりをつけて、黄金色きんを帯びた灰色の圓い高い雲がいくつとはなしにあらはれる。かぎりなく溢れる川のおもてに、青く深く透きとほる流れにかこまれ、撒き散らされてゐる島々のやうに、雲は殆んど動かない。ただはるかに遠く、地平線に近いあたりに雲は動き、雲は互ひに寄りそうて、その間にはもう雲は見えぬが、しかも雲そのものは空と同じやうに瑠璃色に、光と熱とを一ぱいにふくんでゐる。地平線の色はほのかに、薄むらさきの色もあせて、そのまま日の暮れるまで變りなく、見たすかぎり一様だ。陰るところはいづこにもなく、夕立雲の叢るところもなく、ただどこかしらに、青味を帯びた細い筋が低く垂れる、——かと思へば、それは見えるか見えないほどのこまかな雨が蒔き散らされてゐるのであつた。夕方ちかくなると雲は消える。ただ最後の黝くろずんだ煙のやうに覺束ないのが、入目の前に薔薇いろの球たまのやうに浮かんである。昇る時のやうに靜かに陽の沈んだところには、緋の色が夕映えが、しばしの間、昏くなつてゆく地の上に漂ひ、空には、心して徐かに運ぶ蠶こ縮の火のやうに、靜かに瞬きながら夕べの星が點される。かやう日にはすべての色が柔かく明るいけれども冴えてはゐない。あらゆるものが身に沁みるやうな或る温か味を帯びてゐる。こんな日には、ともすれば暑さ厳しく、野原の斜面が『いきれい』ことさへもある。けれど風が鬱積した暑さを吹き拂つて、埃りの渦巻が、——天氣つづきの確かな印しるしの——道に沿ひ、田圃を越えて、高く白く捲きあがり、いづこともなしに行き過ぎる。乾き切つて澄んだ空氣に、苦蓬くほうや、刈りとられた裸麥の香

ひがする。もう一時間で夜になるといふ頃なつても、少しの濕り氣も感じられぬ。麥を刈るのに百姓たちが望むのは、かやうな日和である。

私は丁度こんな日に、トウラ縣のチェールン郡へ松えぞやまじり鷄を射ちに行つたことがある。私は實に澤山の獲物を見つけて射おとした。一ぱいになつた獵囊かりぶくろは容赦もなく肩をいためつけた。私がいよいよ家へ歸らうと思つた頃はもう夕焼の色もあせて、落日の光はうけぬながら、いまだに明るい空には、冷え冷えとして影が次第に濃くなり擴がり出してゐた。私は足早に、長々とつづく灌木の『廣つば』を通り過ぎて、とある丘に登つて行つた。すると右手に藁の木立があつて、遠くに低い白壁造りの教會堂のある、いつも見慣れた平地が見えることと思つてゐたのに、意外にもまるで變つた、見知らぬところが現はれた。足もとには狭い谷がつづいてゐて、眞向ふには峻しい牆壁のやうに、筐柳やまならしの密林が聳てゐる。私は腑に落ちないままに立ち止つて、あたりを見まはした……。『ええ！ とんでもないところへ來てしまつたぞ。右へ右へと寄り過ぎたのだ』と考へ、我ながらどうしてこんな間違ひをしたのかと呆れながら、大急ぎで丘を下りて行つた。すると忽ちにして、さゆらぎだもしない、不愉快な濕り氣にとりかこまれて、まるで穴倉の中へでも入つたやうだ。谷底に高く茂つた草はすっかり濡れて、平らな卓子掛テーブルかけのやうに白い。その上を歩くのは何とはなしに氣味が悪い。急いで向ふ岸へ這ひ上つて、筐柳やまならしに沿つて、道を左手にとつて歩いて行つた。蝙蝠はもう、あやしげに輪を描いて、薄暗いうちにも澄んでゐる空に顫へながら、眠りかけてゐる梢のうへを飛びめぐつてゐる。歸りおくれた若鷺は、埒をさして急ぎながら、勢ひよく、空の高みを眞直ぐに飛んで待つた。『よし、あの端れまで出たら、きつと道もあるだらう』と私は心の中で考へた、『それにしたつて、一露里りほども廻り道をしてしまつた！』

たうとう森の端れまで辿りついたが、道らしいものは一向にない。何かの、刈り残しておいたやうな低い灌木が、限の前に廣々とつづいてゐる。そのさきの遙か遠くの方には茫々たる野原が見える。私はまた立ちどまつた。『何ていふことだらう？……ここは一體どこなんだらう？』晝のうち、どこをどうして歩いてゐたのか、私は記憶を辿り出した！『やつ！ここはパラーヒンの藪だな！』私はつひにかう叫んだ、『てつきりさうだ！ あそこに見えるのがシンヂェーフの森に相違ない、……だが然し、どうしてこんなところへ來てしまつたのだらう？ こんなに遠く？ ……をかしい！ さあ、もう一度、右へとつて行かなくちやならん』

私は灌木の茂みを越えて、右の方へと進んで行つた。そのうちに夜が雷雲のやうに迫つ

て来て、次第に濃くひろがつて行つた。闇は夕じめりと共に、あちこちから立ちのぼつて、また、高いところから流れ落ちて来るやうにさへも思はれる。さうかうしてゐるうちに、踏み均らされてゐない草茫々の小徑に出た。私は氣をつけて前の方を見透かしながら、小徑をたよりに歩いて行く。忽ちのうちに、あたりのものは何もかもが闇に包まれて静まりかへる。——ただ時として鶉の聲が聞えるばかり。小さな夜の鳥が、音もなく、低く、やはらかな羽を擴げて、翔んで来て、私に危く衝きあたりさうになつたが、おづおづとわきへ外れで行つた。私は藪の藪くさぶに出て、畑の中を畦道づたひに行く。もう遠くのものを見分けるには骨が折れる。畑はあたりに灰白く、その向ふには、刻々と大きな團塊かたまりをなして近づきながら、陰鬱な闇が湧きあがつてゐた。いよいよ冷えてゆく空氣の中に私の聲音はかすかに聞える。色の薄らいだ空は、またもや青くなつて来た。しかも、それはもう夜の青味であつた。小さな星が空にちらちらと光りながら、微かに揺れ始める。

私が森と思つてゐたのは、暗い、まん圓い丘であつた。』して見ると、ここはどこだらう?』と私はまた聲に出して同じことを繰り返し、立ちどまつた。これで三度目だ。そして相談でも持ちかけるやうに、四つ足の中では確かに最も利口な、英國種の赤ぶちのわが獵犬デイアンカを見やるのであつた。けれど四つ足の中で最も利口なこの犬も、ただ徒らに尻尾を振り、疲れはてた眼をやるせなげにぼちりとさせたばかりで、これといふうまい分別も授けてくれぬ。犬の前で私はきまりが悪くなつて、まるで急に自分の行くべき道が分かつたかのやうに、自暴やけにずんずん歩いて行つた。丘の据を廻ると、深くもない窪地に出る。そのまはりは耕地になつてゐる。俄かに妙な氣持に捉へられる。この窪地はぐるりが傾斜をなしてゐて、殆んど、柄のついた鐘子かまそつくりの形なしてゐて、底には幾つかの大きな白い石が突つ立つてゐる。——まるで祕密な相談があつて、ここまで這ひ降りてでも來たやうだ、——窪地の中が、あまりにもひっそりしてゐて寂しく、空はその上にあまりにも坦々と、もの凄く垂れかかつてゐるので、私の心は縮み上つてしまつた。何か小さな野の獸が、石と石との間に哀れげな細い影で啼いてゐる。私は急いで再び丘の上に出た。それまでは歸り途を見つけようといふ望みは失はなかつたが、今は全く道にふみ迷つたものとの觀念してしまつた。今はもう殆んど靄の中に没れ去つたあたりの地形を見きはめようとする氣も更になく、私は眞直ぐに星をたよりに、あてもなくずんずん歩き出した。……足をやうやく引きずつて半時間ほどもかうして歩いてゐるのだ。生まれてこの方、こんな荒涼たるところへは一度として來たことがないやうに思はれた。どこを見ても火の光一つ見え、物音一つ聞こえなかつた。だからだらになつた丘は丘に連なり、野は涯しなく野に連な

り、藪は私の鼻先へ地べたから不意に湧き出したかのやうに見える。私はなほも歩きつづける。そしてもうどこかで朝まで野宿しようといふつもりになつてみると、急に怖ろしい淵の上に出てゐるのであつた。

私は踏み出した足をひよいと後に引いた。微かに明るい宵闇を透かせば、はるか下の方に廣い平原が見える。廣い川が平原を半圓形にめぐつて、向ふの方へ流れてゐる。鋼鐵はがねいろの、時をり微かに閃く水の照りかへしに、川筋がそれと知られる。私の佇たつてゐる丘は急に殆んど垂直な斷崖に盡き、巨きな斷崖は青味を帯びた罅空を背景に、くつきりと黒く浮き出し、眼の前の丘の斷崖の眞下、動かない暗い鏡のやうな川のほとり、斷崖と平原とが結びつく片隅には、二つの火が並んで、赤い焔をあげて燃えたり煙つたりしてゐる。火をとり巻いて人がうごめき、影が搖れる。また折々は小さな捲毛の頭の前面が、くつきりと照らし出される……。

ここで私は自分の迷ひ込んで來たところが分かつた。この草原は私たちの地方でビエージンの草原と云つて評判の高いところであつた……。しかし、もう家に歸れる見込みはない。殊に夜分のこと、足は疲れ切つて、竦んでしまつてゐる。仕方がないから火のある所に近づいて、家畜商人らしく見受けられる人たちの仲間に入つて、夜明けを待つことに覺悟を決めた。私は無事に崖を降りて行つた。ところが、最後に藪まへてゐた小枝をいざ放さうといふところへ、矢庭に二匹の大きな白い尨犬が怨めしさうに吠えかかつて來た。子供らしい甲高い聲が火のまはりから聞こえて來て、二三の少年がひよいと地べたから立ち上つた。誰だと叫ぶ子供らの聲に應へる。子供らは私に近づいて來て、わがディアンカがひよつこり現はれたに殊更びつくりしたらしい犬を呼び戻す。私はみんなのゐる方へ近づいた。

火のまはりに坐つてゐる人たちを家畜商人と見たのは間違ひであつた。これは何のことはない、馬の群れの番をしてゐる隣村の百姓の子供らなのであつた。私たちの方では、夏の暑い頃になると、夜分に馬を逐ひ出して、草を食べさせる。晝間は蠅や虻がうるさいからであらう。馬の群れを日の暮れぬ前に追ひ出して、翌くる朝、夜の白む頃に追ひかへす、——これが百姓の子供たちにとつては非常な楽しみなのである。帽子をかぶらずに、古ぼけた膝つきりの外套を着て、ひどく威勢のいい百姓馬に跨がり、楽しさうな喊聲をあげたり、喚いたり、手足を振りながら駛つては、高く跳びあがつたり、聲高く笑つたりする。軽い埃りが黄色な柱のやうに立ち上つて、街道について疾る。よく揃つた蹄の聲が遠くの方まで響き渡り、馬は耳をびんと立てて駈けて行く。先頭第一には尾をふり上げて、絶え

ず歩調を變へながら、ふり亂した鬣に牛蒡の種をつけて、栗毛の尠毛といったやうなのが駛つて行く。

私は道に迷つたことを少年たちに話して、そのわきに腰をおろす。子供たちは私にどこから來たのかと訊ね、それから暫く口を噤んで、わきの方へ寄つてくれた。私達は少しばかり話をした。ぐるりを馬に、齧られた小さな灌木の蔭に身な横たへて、私はあたりを見廻しはじめた。それは實にすばらしい光景であつた。焚き火のまはりには、圓い紅らみがかつた光の環がふるへて、闇に吸ひかこまれて消えてしまつたのかと思はれる。蝨は時をりぱつと燃えあがり、光の環の外までも急速な反射を投げ散らす。かぼそい光の舌は、花も葉もない楊の枝を一舐めして、そのまま消え失せてしまふ。すると今度は尖つた、長い影が自分の方から忽ちのうちに侵^{しの}び込んで來て、火の眞際までおし寄せて來る。闇と光と組打ちをするのだ。時として、蝨の勢ひが弱くなつて、光の環が狭められると、襲ひかかつて來る闇の中から、だしぬけに鼻づらの白い栗毛や、眞白い馬の首があらはれて、すばやく長い草を齧みながら、まじまじと、ぼんやりした眼をして私達を見つめ、またうなだれる、かと思ふと忽ちにかくれてしまふ。後にはただ相變らず草を齧む音、鼻を鳴らす音が聞こえるばかり。光のあたるところからは、闇の中でしてゐることが、なかなかに見分けがつかぬ。だから、手近にあるものまで、何もかもが黒い幕にでも隔てられてゐるやうに見える。が、遙かに遠く、地平線に近いあたりには、丘や森が長く點在してゐるのが見える。暗いながらも澄み渡つた神秘的な壯麗さをたたへながら、私達の上に嚴かに、涯もなく高くかかつてゐる。あの一種特別な、疲れを誘ふまでの、爽かな香ひ——露西亞の夏の夜の香りを吸ひ込むと、胸は心地よく締めつけられるやうだ。あたりには殆んど物音つ聞えない……、ただ稀れに、近くの川にだしぬけに大きな魚が飛び跳ねて水音を立てると、寄せ來る故に僅かに揺れて、汀の葦が軟かにそよいでゐるばかり……。焚火ばかりが靜かに、ぱちぱちと爆^はぜてゐる。

子供たちは火のまはりに坐つてゐる。そこにはさつき私に齧みつかうとした二匹の犬も坐つてゐる。犬は私が傍にゐるので永いこと心を落ちつけることが出來ず、睡たげな眼を細め、横目で火の方を見ながら、時をりは自分たちの威嚴を極度に感じて唸つたりした。最初は唸るだけであつたが、後には思ひ通りにならないことを悲しむかのやうに、いくらか泣き聲になつて來た。少年たちは、フェーヂヤにパウルーシヤに、イリユーシヤにコスチャにワーニヤ、全部で五人であつた。(この名前は、話を聞いてみて承知したのであるが、いま私はこの少年たちを讀者諸君に御紹介しようと思ふ)

先づ一番年かきなのがフェーヂャで、年頃は十四くらゐに見える。すらりとした子で、きれいな、ほつそりとした、いくらか小づくりな顔をしてゐて、捲毛の、光澤のある髪に、ぱつちりした眼をし、いつも半ば愉しさうな、半ば香氣さうな微笑みを浮かべてゐる。様子を見るのに裕福な家庭に育つたらしく、この野原へ來たのも暮らし向きの必要からでなく、ただ何となく慰み半分に來たものらしい。黄色い鬘をとつた華やかな更紗の襯衣を着て、小さな新しい百姓外套を引つけてゐるが、それが撫肩から今にも滑り落ちさうになつてゐる。淺黄の帯には梳櫛がさがつてゐる。胴の淺い長靴は、たしかに自分のもので、親父ゆづりではなかつた。次の少年パウルーシヤは纏れた黒い髪の毛に、灰色の眼をし、蝨呻が廣く、蒼白い、痘痕顔をして、口は大きいながらも締まりがあつて、頭は俗にいふ『麥酒鐘』ほど大きく、體はずんぐりしてゐて不恰好である。この少年は決して器量よしではなかつた、——それは否むわけには行かない。しかも私はこの子が氣に入つた。まことに利口さうで、率直で、またその聲には力がこもつてゐた。着物は人に自慢の出来るやうなものではなかつた。身につけてゐるものといへば粗末な手織の襯衣と、補綴のあつた股引だけである。三番目のイリュエシヤの顔は甚だ振つはなかつた。鉤鼻に、しよぼしよぼした眼、間のびのした輪郭、すべてが一種の愚鈍らしい病的な焦心をあらはしてゐた。固く結んだ唇はいささかも動かさず、引き寄せられた眉は弛むことなく、——絶えず焚火が眩しいので顔を擧げてゐるやうな恰好である。黄いろい、といつても殆んど白に近い髪の毛は、しよつちゆう兩手で耳の上まで引つ張り下ろしてゐる低いフェルト帽のかけから、尖つた鱗のやうにはみ出してゐる。新しい木の皮沓と脚絆を穿いて、胴のまはりを三重に巻いてゐる太い繩は、さつぱりした黒の長襯衣をびつたり締めつけてゐる。この子もパウルーシヤも見たところでは十二を越してゐまい。四番目のコスチヤはまだ十歳そこそこの少年で、その物思はしげな悲しさうな眼つきは私の好奇心をそそる。顔は大きくなく、瀧せてゐて、雀斑があつて、栗鼠のやうに顎が尖つてゐる。唇はやつと見分けがつくくらゐに薄い、大きい黒味がちの光る眼は、みづみづしく輝いて、異様な印象を與へる。口では——少くとも彼の口では、——言ひあらはすことの出来ない或るものを、この眼が語るうとしてゐるやうに見える、彼は背が小さく、弱々しさうな身體つきをしてゐて、身なりもかなりに見すばらしい。残る一人のワーニヤ、これは最初、私の眼にとまらなかつた。この子は蓆をかぶつて、おとなしく丸まつて、地べたに寝ころんでゐた。ただ時をりは亞麻色の捲毛の頭をのぞかせてゐた。この子はせいぜい七つ位であつた。

かうして私はわきの灌木の蔭に横になつて、子供たちの様子を眺めてゐた。小さな鍋が

一方の焚火にかかつてゐて、鍋の中には『馬鈴薯』が煮えてゐる。パウルーシヤは鍋の番をし、跪たざづいて、沸たぎり出した湯の中へ木串を突つこんでゐる。フェーヂヤは外套の裾を伸べて、盞せん苳そうをつきながら横になつてゐる。イリユーシヤはコスチャのわきに坐り、相變らず一生懸命に眼を細めてゐる。コスチャは少しくうなだれて、どこか遠くの方を見てゐる。ワーニヤは蓆をかぶつて身動きだもしない。私は眠つたふりをした。子供たちは又ぼつりぼつり話を始めた。

最初はみんなが、あれやこれや、明日の仕事のことや馬のことなどを、とりとめなく話してゐたが、不意にフェーヂヤがイリユーシヤの方を向いて、中斷されてゐた話を引き戻すやうな風をして、彼に訊ねた。

「そんなら、何かい、お前はほんとに家魔ドモライを見たのけ？」

「うんう、見ねえよ、ドモライは見らんねんだもの」とイリユーシヤが噎おれた、低い聲で答へたが、その聲音は顔の表情とこの上なく釣り合つてゐた、「おれは聲を聞いただけなんだよ……、それも俺おればかりぢやねえんだ」

「お前めら方のどこにゐるんだ？」とパウルーシヤが訊く。

「あの古い紙漉場かみすきばによ」

「おめえら、工場かみすきばさ行つてんのか？」

「行つてつとも。おらアヴヂューシカ兄あにちやんと、仲方のしかたやつてんだぞ」

「あれ、お前めは職人めえなんだな……」

「さあ、それぢや、どうして聞けたんだい、その聲は？」

「あの、な。俺とアヴヂューシカ兄あにちやんと、フォードル・ミヘーフスキイとイワーシカ・カスイと、赤ツラリスヌイ・ホルムイ丘クから來たもう一人のイワーシカと、イワーカ・スホルーコフと、それからもつとゐたんだ。みんなで十人位くじゅうゐただけど、みんな當番の組で、紙漉場かみすきばさ宿直とまりになつたんだ。本當の宿直とまりつていふわけぢやないんだけど、監督とまのナザロフが歸かえさねんだもん。『お前めら、家おんへ歸かえりてえつたつて、明日あしたは仕事あしたがうんとあるんだから、歸かえつちやなんね』つて。そいで俺おんら残つて、みんな一緒におんごろ寢してたんだ。そしたらアヴヂューシカが、さあ、家魔ドモライが出たらどうする？ なんて言いつたんだ……。アヴちやんが、まあだ言いひ切らねえ内に、ふいと誰おんだか俺らの頭の上を歩き出したんだ。俺おんらは下に寢てんのに、そいつは上の車輪くるまの邊を歩き出したんだ。じつと聽いてたら、歩いてて、歩くたんびに踏み板おんがしなつて、みしみしするんだ。それから俺らの頭の上を通り過ぎてしまふと、急に水がさらさらさらつと水車に流れ込んで、水車がぎいこつとんと鳴つて廻り出した。樋の水がさらさらさらつと水車に流れ込んで、水車がぎいこつとんと鳴つて廻り出した。樋の

口は外づしてあんのにな。誰が口を上げて、水を落したんだか、俺ら不思議でしやうがね。でも、水車は暫く廻つて、それきり止まつちやつたんだ。やがて、足音は上の戸んところへ行つて、梯子段を、こんな風に、何だか急いでもゐねえやうに、ゆつくりゆつくり降りて来るんだ。梯子段も歩くと唸るやうな音を出して……、そのうちに、いよいよ俺らの部屋の戸口まで来て、暫くのあひだ、待つてゐる、待つてゐる、——そしたらひよいと戸が一ぱいに開いちやつたんだ。俺ら、たまげちやつて、見ると、何にもゐねえ……ふいっと、今度は大桶のわきの漉桁が動き出して、持ち上つて、水に浸つたかと思ふと、水の外を歩いて、こんな風に歩いて、まるで誰かが、濯いでるやうだつて、また元ところへ歸つちやつた。さうすると今度は他の大桶のそばにあつた鉤が釘からはづれて、また元の釘に引つかかる。それから今度は誰か戸口の方さ行つたやうだと思つたら、いきなり咳をはじめた。何でも羊みたいによ。それからごほんとやつたんだ。……俺らみんな一かたまりになつて、お互ひに、からだの下に頭を突つこんぢやつたよ……。あの時はほんとにおつたまげたなあ！」

「ほう、さうかい！」とパーウエルが口を出した、「だが、一體、あいつは何だつてまた咳なんぞしたんだか？」

「知んね。きつと濕つぽいからかも知んね」
暫く誰もが黙つてゐる。

「どうした」とフェーヂヤが訊く、「馬鈴薯は煮えたかな？」
パウルーシヤが突ついてみる。

「駄目だ。未だ生だ……。あれ、何だか跳ねたぞ」川の方へ顔を向けて、彼はかう附け足した、「きつと、梭魚だ……。あれ、星が飛んだ」

「いや、みんな、おら話すことがあるんだ」とコスチャが細い聲でいひ出した、「あのな、この間、父ちゃんが話してくれたことなんだがな」

「よし、聞かして貰はう」とフェーヂヤが、尻押し顔にいふ。

「お前ら、ガヴリーラを知つてつか、あの大村の大工がこと？」

「うん、知つてつとも」

「んぢや、どうしてあいつがあんなにいつも陰氣な顔して、物を言はねんだか、知つてつけ？ あんなに陰氣なのはな、かういふ譯なんだよ。父ちゃんが話して聞かしたんだけど、あの人がな、胡桃とりに森さ行つたんだと。うん、胡桃とりに森さ行つたんだけど、道まぐれつちやつてよ。どんどん入つてつちやつて、とんでもねえ所さ入り込んぢやつた

のよ。一生懸命にあちこち歩き廻つたけれど、それでもなあ、駄目よ！ 道なんざ見つらんね。表はもう眞つ暗くなつた。それで仕方がねえんで、樹の下さ坐つて、『朝まで待つべ』と思つたんだと。坐つてたら、居眠りし出したんだ。うとうとやり出したと思つたら、急に誰かが呼ぶ聲がする。見たつて、誰もゐねえ。またうとうとやり出すと、また呼ぶ聲がする。今度はよく眼をあけて見ると、前の木の枝に水妖ルサレカがゐて、からだなゆすぶりがら、大工を呼んでゐる。息がとまりさうなくらゐ笑つて、笑つて、さんざん笑つてゐる……。それにお月さまは眞つ晝間のやうに、とてもとても明るいので、何から何まで見えるんだ。水妖ルサレカはやつぱり大工を呼んでゐる。水妖ルサレカは體ぢゆうが透き通るやうに白くつて、枝さ腰かけてる。ちやうど鱸ササギか、白楊魚カハギスみたいに、——でなけりや、ほら、あんなに白くぼくて銀色なのは鮒フナだな……。大工のガヴリーラはぼうつと氣が遠くなつちやつたのに、水妖ルサレカの方ぢやあ、やつぱし笑つてて、來い來いつて、手で招んでゐるんだと。ガヴリーラはすんでのことで起き上つて、水妖ルサレカのいふことを聴くところだったが、きつと神様が教へて下さつたんだな、いきなり氣がついて十字を切つたんだつて……。その十字を切んのは、とても大へんだつたと。手がほんとに石みたいになつて廻らなかつたつてな。ああ、なんておつかねえことなんだろう！ ……それで、やつと十字を切つたんでな、水妖ルサレカは笑ふのをやめて、急に泣き出したんだ……。泣いてな、眼を頭髮あたまの毛で拭くんだけけど、水妖ルサレカの毛つていふのは、まるで大麻みてえに碧いんだぞ。それでガヴリーラがじつと水妖ルサレカを見て、よく見て、訊き出したんだ、『おい、森の精、何だつて泣くのだ？』つて。すると、水妖ルサレカはかういつたつてよ、『これ、人間よ、お前さんが十字なんかを切らなかつたら、死ぬまで私と一しよに面白く暮らせたものを。お前さんが十字なんか切るものだから、私は悲しくつて泣いてるんだよ。けれど、私ひとりばかりが惱みはしないよ。お前さんだつて、生涯、惱みつづけるやうにして上げるわ』さういふんだ。と思つたら、消えちやつたんだ。すると直ぐにガヴリーラに分かつて來たんだ、どうしたら森の中から出られつか、分かつて來たんだ……。その時からだよ、あんなにいつも陰氣な顔をしてんのは」

『へえっ！』と暫くのあひだ黙つてゐたフェーチャがいふ、『だつて、どうしてあんな山鬼なんぞが、そんなに基督信者しんじやの魂こころを荒らせるのかな、だつて、ガヴリーラだつて、そいつのいふことを聴かなかつたんぢやねえけ？』

「ああ、そしてな、見ろ、お前めえ！」コスチャがいふ、「ガヴリーラの話ぢや、水妖ルサレカの聲は蝦蟇がまみてえに、悲しさうな聲だつてよ」

「お前の父つあんが、それを話して聞かしたのかい？……」フェーチャがつづけていふ、

「うん。おら、天井床バラーチに寝てて、すつかり聞いたんだ」

「きたいな話だなあ！ どうして大工は悄せう氣てんのかな？ ……さうすつと、きつと。パラーチはガヴリーラが氣に入つたんで、それで呼んだんだな」

「うん、氣に入つたんだよ」イリューシヤが相槌をうつ、「さうとも！ 水妖ルサルカはガヴリーラをくすぐ搦なんべと思つたんだな、きつと、さう思つたんだ。搦くすぐんのが商賣もなんだよ、あの水妖ルサルカなんどの」

「けれど、ここいらにも、きつと水妖ルサルカがあるんだんべ」とフェーヂヤがいふ。

「ぬねえよ」とコスチャが答へる、「ここらはきれいで、明けつ放しな所だもの。ただ、川が近くにあるけんど」

誰もが黙り込んでしまった。不意にどこか遠くの方に、呻くやうな、物音が、長く尾をひいて、響き渡る。時おり、深い静寂の中に起こつて、上へ上へと昇つて行つて、暫く空中に漂ひ、やがて、靜かに吹き散らされてゆく、あの名状しがたい夜の物音の一つである。耳をすましてみても、何も聞こえないやうで、それでゐて、やはり鳴り響いてゐる。誰かが、地平線のあたりで、長々と叫び聲あげると、も一人、誰かほかの者が、森の中から細い、鋭い笑ひ聲でそれに應へ、微かな、しゅうというやうな音が川のおもてを走つてゆくのやうに思はれる。子供たちは顔を見合はせて、身慄こひした。

「俺たちには神様がついて下さる！」とイリューシヤが呟く。

「やい、臆病鳥！」パーウエルが叫んだ、「なに魂消たまげてんだ？ 見ろ、馬鈴薯じゃがいもが煮ねえたぞ」(一同は鍋のそばへ寄つて来て、湯氣の立つ馬鈴薯を食べ始めた。ただワーニヤだけは身動きもしなかった)「おい、どうしたんだ、おめえ？」とパーウエルがいふ。

けれども彼は蓆の下から匍くひ出して來なかつた。鍋は忽からち空になつた。

「あのな、お前めえら、聞いたか」とイリューシヤがいひ出した、「この間、おら方のワルナワルナ」

「あの、土堤の上でけ？」

「うん、さうだ、あの土堤の上だ、切れた土堤の。あすこはとつても氣味わるいところだ、さむしいところだぞ。今にも化物が出さうなところだぞ。まはりに窪くぼつたまりだの、谷だのばつかしあつて、谷の中にはいつも蛇へんがあるんだ」

「うん、それで、どんなことがあつたんだい？ 話して聞かせろよ……」

「あのな、こんなことがあつたんだ。フェーヂヤ、きつとお前めえ、知んめえけんど、おら方のあすこにはな、土左衛門が埋まつてんだ。昔々、池がまだ深かつたところに土左衛門に

なつちやつたんだ。墓場はまだ見えら。少し見えら。こんなにな、土饅頭がな……。それ
でな、先日、お邸の番頭が、獵犬番のエルミールを呼んで、『エルミール、駄遞へ行つて來
う』って言つたんだ。おら方のエルミールはしよつちゆう駄遞さ行くのが役目だつたんだ。
自分の預かつてゐた獵犬をみんな死なつしやつたんで。何でだか知んねけど、エルミ
ールの手にかかると犬が生きてかねんだ。本當にいつも生きてたこたあねえんだ。いい獵犬番
でな、非のうちどころのねえ人間だけんど。それでな、エルミールは郵便とりに馬に乗つ
てつて、町でぐづぐづして、歸りにはもう酔つぱらつてた。その晩は明るい晩で、お月様
も照つてゐた。……かうしてエルミールは土堤のところにさしかかった。通り道だから仕
方がね。そこを獵犬番のエルミールが馬に乗つて通ると、土左衛門の墓のうへに、小羊が、
眞つ白い、縮れつ毛の可愛らしい小羊が行つたり來たりしてゐる。それで、エルミールは
『よし、一つあいつを捕まへてやらう、——なんで逃すもんか』と思つて、馬から下りて、
両手で抱き上げたんだ。……それでも羊は平氣の平左なんだ。エルミールが馬のそばまで
來ると、馬は鼻を鳴らしながら飛びのいて、しきりに首を振るんだ。それでも、その人は
『どうどう』と馬にいつて、羊を抱いたまんま馬に乗つて、また進んで行つた。羊を胸の
ところへ抱へて。エルミールが羊を見ると、羊もじいつとエルミールの顔を見るんだ。こ
んなにな。それで、獵犬番のエルミールも氣味が悪くなつて來た。『羊がこんなに人の顔を
見つめるなんて、まだ聞いたことのないことだ』と思つたが、別に變つたこともない。こ
んな風に羊の毛を撫でて、『羊、羊！』つていつたんだ。さうすると、直ぐに羊も齒をむき
出して、『羊、羊！』つていふんだつて……」

この話をしてゐた子供が、まだこの最後の言葉を口にするかしないうちに、いきなり二
匹の犬が一せいに跳ね起きて、聲すさまじく吠え立てながら、火のそばから駆け出して、
闇のなかに消えて行つた。子供たちはみなぎよつとした。ワーニャは蓆の下から跳ね起き
る。パウルーシャは大聲をあげながら犬のあとを追ひかける。犬の吠える聲は忽ちに遠く
なつた。……驚いた馬の群れが右往左往するただなぬ蹄の音が聞こえる。パウルーシャ
は大きな聲で叫んでゐる、「白！」「黒！」……やがて吠える聲がやむ。パウルーシャ
の聲はもうかなり遠くの方から聞こえて來る……。また暫く經つ。子供らは何ごとかが起
こるのを豫期してでもあるかのやうに、そはそはしながらあたりを見まはす……不意に飛
ばして來る馬の蹄の音が聞こえる。馬は薪の積んであるすぐ側に、はたと止まる。鬣にし
つかりつかまつて、ひらりとパウルーシャが飛び降りる。二匹の犬はまたもや光の環の中
へ駆け込んで來て、赤い舌を出しながら、直きに坐る。

「何がゐた？ 何だ？」子供たちが訊く。

「何でもないよ」パウルーシヤは手で馬を逐ひのけて答へる、「きつと犬が何か嗅ぎつけたんだよ。俺は狼だと思つた」胸一ぱいに、せはしく呼吸をしながら平氣な聲で附け加へる。

私は思はずもパウルーシヤの姿に見とれた。このときの様子はまことに立派だつた。早駆けのために活氣づいた不器量な顔は、剛膽と堅い決心とに燃えてゐた。宵闇に棒きれ一つ持たず、彼はいささかもためらふことなく、ただひとり狼を目ざして突き進んで行つたのだ……。『何ていふ豪い子だらう！』と私は彼を眺めながら考へた。

「それぢや、あの、みんならは狼を見たことあんのけ？」と臆病者のコスチャが訊ねる。

「ここらにや何時でもうんとゐる」パウルーシヤが答へる、「でも、冬だけだよ、怖えのは」

彼はまた焚火のまへにうづくまつた。地べたに腰をおろしぎはに、一匹の犬のむくむくした頸に手をかけた。御氣嫌をとられた犬は有難さと得意さを感じてゐるらしく、時をり横目にパウルーシヤの方を見ながら、いつまでも首を動かさなかつた。

ワニーヤはまた蓆の下にもぐり込んだ。

「イリユーシヤ、さつきの話は、ずゐぶん怖^{おどろ}えな」とフェーヂヤが話し出した。裕福な百姓の息であるから、いつも音頭取りにならなければならぬ（尤も自分では口敷をきかない。自分の品位をおとすのを怖れてでもゐるかのやうに）。「それで、さつき犬が吠えたのは、何かの化け物が吠えさせたんだよ……。うん、さうだ、おれも聞いたよ、お前ら方のあすこは氣味悪い所だつてな」

「ワルナギーツイか？ ……きまつてら！ ……あすこはとつても氣味わりいとこだよ！ あすこでは、何べんも大旦那様を、——死んだ旦那様見た人があるちけよ。裾の長い上衣を著て、行つたり來たりして、いつもかうして溜息ついて、地べたを見まはして、何だか搜してんだちけ。一度はトロフイームイチぢいさんが出遭つて、『旦那様、イワン・イワーヌイチ、そんなに地べたを御覧になつて、何をお搜しなすつてらつしやるんですか？』つて訊いたんだよ……」

「おぢいさんがさう訊いたのかい？」とびつくりしてフェーヂヤが念を押した。

「うん、訊いたんだ」

「ほう、トロフイームイチは、とても偉かつたんだなあ……。さあ、それで旦那は何だつて？」

『錠切草をさがしてゐるのぢや』といふ返事だったが、その聲がとてもとても低くつて、『錠切草』つて、こんな風なんだよ。『旦那様、イワン・イワーヌイチ、錠切草なんて、何になさるのです？』といふと、『わしを壓しつけるんだ。墓が壓しつけるんだ、トロフイームイチ、だから向ふへ脱け出して樂になりたいのだ』つて……」

「ほう、とんでもない！」フェーヂャがいふ、「して見ると、餘り長生きしなかつたんだな」

「ああ、たまげた話だ」コスチャが口を出す、「おれはまた、萬聖節の時しか、死んだ人には會へないと思つてた」

「死んだ人にはいつだつて會へるよ」と、私の見たところでは、誰よりもよく村の迷信に通曉してゐるらしいイリユーシヤが確信ありげな口吻で引き取つた、「だけど、萬聖節の日には、その年に死ぬ番にあたつてゐる人なら、生きてる人でも見分けられるつてよ。見たければ、夜、教會堂の玄關に立つて、じつと街道の方ばかり見てりやいいんだ。さうすると、生きてる人がな、それ、その年のうちに死ぬ人が、道を通り過ぎるんだ。去年は、村のウリヤーナ婆さんが教會堂の玄關へ見に行つたんだ」

「それで、誰を見たんだい？」とコスチャが好奇心をもつて訊ねる。

「見たとも。初めはずいぶん長いこと、じいつと坐つて待つてたけど、誰も見えねえし、なんにも聞こえねえ……、ただ犬ところが何處かで、かうして一しきりに吠えてゐる、いつまでも吠えてゐる、そんな氣がするんだ……、そのうちにひよいと見ると、小徑を男の子が襯衣一枚で歩いて来る。よく見ると、イワーシカ・フェードセーフがやつて来るんだ……」

「あの、この春死んだ子供？」とフェーヂャがさへぎる。

「うん、さうだ。あれがとぼとぼ歩いてて、顔を上げねえんだ……、それでも、ウリヤーナ婆さんには誰だか分かつたんだ……、でも、それからまた見ると、今度は婆さんが歩いてる。ウリヤーナ婆さんは一生懸命に見ると――、え、たまげるだらう！……その道を歩いてる婆さんは自分なんだ。あのウリヤーナ婆さんがな、自分でよ」

「自分でなんて、そんなことがあるもんか？」とフェーヂャが訊ねた。

「ほんとだとも。嘘ぢやねえよ」

「でも、變だなあ、あの婆さんはまだ死なないぢやないか？」

「だつて、まだ一年とたたないもの。見ろよ、あの婆さんはやつと呼吸をついてるだけなんだから」

一同はまた静かになつた。パーウエルは枯枝を一つかみ火に放りこんだ。急に燃えあがる森に枯枝はくつきりと黒く浮き出し、ばちばちと音を立て、煙をあげ、焼けた端の方をいくらか上にしながら反りはじめる。光の反射は、はげしくふるへながら、四方八方に、わけても上の方に伸びる。不意にどこからともなしに一羽の白い鳩が、まつしぐらに明るい光の中へ飛び下りて来て、燃えさかる火影な一ぱいに浴びながら、一ところをぐるぐると廻る。やがて翼を鳴らしながら消え失せる。

「きつと家からはぐれちやつたんだ」とパーウエルがいふ、「だからどつかへ出るまで飛んで行つて、出たところで夜明かしをするんだらう」

「でも、パウルーシヤ、あれは正直な人間の魂が天へ昇つて行つたんぢやないかな、え？」
パーウエルは火の中へ、もう一つかみの枯枝を差しくべる。

「さうかも知んね」つひに彼もいふ。

「ぢや、話して聞かせるよ、パウルーシヤ、たのむから」とフェーヂヤがいひ出す、「お前ら方のシャラーモフでも天の前兆は見えたのか？」

「お天道さまが見えなくなつた時のことだらう？ そりや、見えたとも」

「きつと、お前らもたまげたらう？」

「でも俺らばかりぢやねえぞ。俺らの旦那様なんぞ、前から、今度、前兆あるぞつて、俺らに話してたくせして、暗くなつて來たら、自分でとてもたまげつちやつたさうだ。それから女中部屋ぢや、暗くなつて來たら、料理番の婆さんが、おめえ、直ぐに壺をみんな持ち出して、火竈きで毀しちやつて、竈ん中へ打つ込んぢやつたんだ。『もう世の最後の日が來たんだから、今さら物を食ふ人なんかいないぞ』つてな。それで、おつゆがそこらぢゆう一杯こぼれたんだ。それから村ぢや、こんな噂があつたつけ。白い狼が世界中を駆け廻つて人間を食つてしまふだの、生餌をとつてたべる鳥が飛んで來るだの、やれ、恐しいトリシカの姿が見えるだらうのつて」

「そのトリシカつてのは、どんなの？」とコスチャが訊ねた。

「お前、知らねえのか？」とイリユーシヤは熱をもつて引き取つた、「お前、トリシカを知らねなんて、お前はどこの者だ？ お前の村にや世間知らずが揃つてんだな、井戸ん中の蛙がな！ トリシカつちふのは、いつかは世の中へ出て來るおつそろしい人間でな、とてもおつそろしい人間で、出て來ても、捉めえることもどうすることも出來ねえんだぞ。

みんなが、たとへば百姓が、そいつをつかめべと思つて、棒もつて追つかけて取り卷いたつて、そいつは百姓の眼をくらし、——すつかり眼をくらしちまふもんだから、みんな

なが同志うちをやるやうなことになるんだ。牢屋へでもぶち込んでみる、さうすると柄杓へ水を入れて来て、飲ましてくれろつていふ、柄杓を持つて行くと、柄杓ん中へもぐり込んで、ふいつと消えちやうんだ。それから鎖でつないでおくと、ぽんとそいつが手を叩く。するともう鎖はばらばらに解けちまふ。まあ、こんな風にして、そのトリーシカは村だの町だのを歩きまはるんだ。このトリーシカは悪智慧がある奴だから、たくさんの基督信者を迷はすんだ……、それでもどうすることも出来ねえんだよ……、本當にあれば悪智慧のある、おつそろしい奴だからな」

「まあ、さうだ」パーウェルは持ち前のゆつたりした聲で話しつづける、「そんな奴だよ。つまり、こいつを俺らが方ぢや待つてたのよ。年寄り達は天の前兆が始まると、すぐにトリーシカがやつて来るぞつて言ひ出したんだ。そのうちに、前兆が始まったのよ。村中の者はみんな、往還だの畑だのへ散らばつて、どんなことになるかと待つてたんだ。おら方は、みんなも知つてる通り、見晴らしのいい、廣々としたところだ。みんなが見てるように大村の方から、妙な男が坂道を下りて来るんだ。とてもおつそろしい頭をしてるんだ、……だから、みんなが『おや、トリーシカが来るぞ。おうい、トリーシカが来るぞ！』つて呶鳴つて、四方八方へ逃げ出したもんだ。名主は濠ん中へ這ひこむ、奥様は門の下の嵌め板にはまつて、命がけで呶鳴る。あんまり怒鳴つて飼ひ犬をびつくりさしたもんだから、犬は鎖をちぎつて、籬を越えて森ん中へ逃げこんだ。それからクジカの親父のドロフェーオツチは燕麥の畑ん中へ駆け込んで、ちよこんと尻餅をついたまま、鶉みたいな聲を出して、『いくら人殺しの悪黨でも、小鳥ぐらゐは見逃しなさろ』と喚くのだ。こんな風に、みんなが大騒ぎをしたんだ……、ところが、その男は村の桶屋のワヴィラだったのさ。新しい木彫の壺を買つて、その空の壺を頭にかぶつて来たんだよ」

子供たちはみんなどつと笑ひ出した。やがて、野天で話をしてゐる人たちにはよくあることであるが、また暫くのあひだ、しんとしてしまつた。私はあたりを見まはした。夜は厳かに重々しく更けてゆく。浅宵の露をふくんだ涼氣は夜半の乾いた濕さに變る。この温みは浅い眠りにおちた野原に、やはらかな寝帳のやうに、なほ暫くとどまつてゐることだらう。黎明の最初のささやきを耳にし、最初の露しづくを見るまでには、まだだいぶ間がある。空には月もない。その頃は月の出が晚かつたのであつた。數限りもない金色の星が、相競うてきらきらと輝きながら、みな靜かに天の河の方に流れてゆくやうに見える。確かに星をながめてゐると、箭のやうに速く、絶えてとどまることのない地球の運行が仄かに感じられる……。ふと河のうへに、奇妙な、鋭い、痛々しい叫び聲が二度ほど聞こえたが、

暫くすると今度はずつと遠くの方で繰り返された……

コスチャは身懷ひした……。何、あれは？」

「あれは蒼鷺が啼いてるんだよ」パーウエルが落ちついて答へる。

「蒼鷺」コスチャが鸚鵡返しにいふ、「そんなら、パウルーシヤ、昨日の晩におれが聞いたのは何だらう？」暫く言葉を切つて、また言ひ添へた、「きつと、お前なら知つてるかも知れん……」

「何を聞いたんだ？」

「おれが聞いたのはかうなんだよ。昨夜、俺は石山からシヤシキノへ行つたんだ。

初めはずつと胡桃林くるみばやしを通つて、それから草つ原にさしかかった、——ほら、あの谷へ下りて行く険しい曲り角のあるとこだ、「ほら、春つからずつと水溜りがあるだらう。お前も知つてるだらうが、そこには葦が一杯に生えてるで、俺がその水溜りの傍を通つたら、どうだ、ふいつと水つ溜りん中から、誰だか悲しさうに、情けねえ聲で、うーう……うーう……うーう！ つて唸る聲がするんだ。俺あ、おつかかなかつたの何のつて、もう晚いし、そいつがとても苦しさうな聲なんだもの。だから俺あ、本當に泣きつ面になつてたかも知れん……、一體、あれは何だつたかな？ え？」

「一昨年、あの水つ溜りの中へ追まぎが山番のアキームを沈めちまつたんだ」とパウルーシヤがいふ、「だからきつと、アキームの魂が泣いてるんだよ」

「あ、ほんとにさうかも知んね」とコスチャが、それでなくても大きい眼を一そう大きくして相槌をうつた、「俺あ、アキームがあの水つ溜りに沈められたのを知んなかつた。知つてたら、あんなにたまげなかつたな」

「けんど、あそこにや、こんなちび蛙けえるがゐるちけよ」とパーウエルが言葉をつづけて、「それがあんなに悲しさうに鳴くんだと」

「蛙？ なあに、あれは蛙けえるぢやねえよ、……あれが何で……（蒼鷺がまた川の上で鳴いた）——あれ、あいつ奴！」コスチャは思はずも口走つた、「まるで山靈すだまが鳴いてるやうだ」

「山靈すだまは鳴かないよ。聒ただもの」イリューシヤが口を出す、「ただ手をたたいて、木の枝をばちばち鳴らすばかりだよ……」

「ぢや、お前、見たことあんのか、山靈すだまを、え？」フェーヂヤが嘲るやうに茶々を入れる。

「うんう、見たことはねえよ。見てたまるもんか。でも、ほかの人は見たつてよ。ついこの間も、おら方の百姓が引つぱり廻されたんだよ。森やまの中をどんどん引つぱり廻された

んだけど、いつも同じ、森の草つ原のまはりばかり歩かされたんだ……それで、夜の白む頃にやつと家へ歸れたんだ」

「ぢや、その百姓は山靈を見たんだな？」

「うん、その人の話ぢや、でつかい、でつかい奴で、立つてゐるんだけど、身體ぢゆうが黒つぼくて、まるで木の蔭にでもゐるみたいで、よく、見分けがつかねえんだつて。何だかお月様に見られねえやうにかくれてるらしいつて。それで、でつかい眼で、じろじろ見つめて、眼をぱちくりぱちくり、しきりにやつてんだつて……」

「止めるよ、お前！」フェーヂヤは軽く身慄ひして、肩をすくめながら叫んだ、「ちえっ！」

「一體、何だつてそんな汚らしいものが世の中に擴がつてゐるんだらう？」とパーウエルがいふ、「ほんとに！」

「そんなに悪口いふなよ。聞こえるから」とイリユーシャが注意した。

「またもや一座が静まりかへる。」

「見ろ、見ろ、みんなら」とだしぬけに子供らしいワーニヤの聲が聞こえる、「見ろ、天上の小さい星を。蜜蜂みたいに、ごちやごちや集まつてるよ！」

彼は席の下から初々しい小さい顔をつき出して、小さな拳で盞洋をつき、大きな、おとなしさうな眼を靜かに上へ向ける。子供らの眼は一せいに空に注がれて、直ぐには伏せられなかつた。

「どうだい、ワーニヤ」とフェーヂヤが舌たるく答へた、「お前の姉のアニユートカは丈夫か？」

「丈夫だよ」とワーニヤが舌たるく答へた。

「どうして、おら方さ遊びに来ないのかつて、さう言つとくれ……」

「おら、どうしてだか知んね」

「遊びに来るやうに言つてくろ」

「ああ」

「いい物をやるからつて、さう言つて」

「ぢや、おれにもくれる？」

「やるとも」

ワーニヤはほつと溜息をついた。

「でも、おら、要らねえよ。それよか姉にやつてくろ。姉はみんなを、とてもよくしてくれるんだもの」

かういつてワーニヤはまた盃を地べたに押しつけた。パーウエルは立ち上つて、空になつた鍋を手にとつた。

「どこへ行くんだ？」とフェーヂヤが訊く。

「川さ水汲みによ。水飲みたくなつたから」

二匹の犬も立ち上つて、そのあとをついて行く。

「氣をつけて、川ん中さ落つこちなよ」イリユーシヤが後から聲をかける。

「なんで落つこちるもんか？」フェーヂヤがいふ、「あれは氣をつけてるもの」

「うん、そりやさうだがな。でも、いろんなことがあるからな。それ、屈んで水汲むだらう。さうすると、河童ワチャノイが手をつかまへて、水ん中へ引つ張むかも知れないよ。さうすと、後でみんなが、あの子は水へ落つこちたつて、さういふだらう、……けども、落つこちたんぢやないよ！……ほうら、葦ん中へ這ひ上つた」彼は耳を傾けながら言ひ足した。「やぶちゃん注…この「水ん中へ引つ張む」は「水ん中へ引つ張（り）込む」の脱字ではなからうか。」

なるほど葦が押し分けられて、私たちの方で俗にいふ『さやさや』といふ音を立てる。

「ほんとかな、あれは」とコスチャが訊ねる、「あの馬鹿のアクリーナが水ん中に落つちてから、氣が違つたつていふのは？」

「さうよ、あの時からだよ……今ぢやあんなさまになつて！ それでも元は好い女だつてつて。河童カッポに崇たられたんだよ。きつと、河童は、みんながあんなに早くアクリーナを引き出すなんて思はなかつたんだよ。それであの、水の底で崇つたんだな」

（私もこのアクリーナには一再ならず會つてゐる。檻樓をまとひ、恐ろしく濼せ細つて、炭やうに眞黒な顔をし、濁つた眼つきをして、いつも齒をむき出し、ともすると道の眞ん中に、骨と皮ばかりの両手をしっかりと胸にあてて、檻の中の野獸のやうに、そろそろとよろめきながら、何時間も一つところで足踏みしてゐる。何をいつても通じないで、ただ時をり引き吊つたやうに高笑ひをするばかりである）

「みんなの話だと」とコスチャが續ける、「川へ身投げしたのは、色男に欺されたからだつて」

「ほんとだ」

「それから、ワーシヤを覚えてつか？」悲しさうな聲でコスチャが附け足す。

「どのワーシヤよ？」とフェーヂヤが訊ねる。

「ほら、あの、この川へ落つこちて死んだのよ」コスチャが答へる、「やつぱりこの川でだ。何て可愛い子だつたかなあ！ ああ、とてもいい子だつたがなあ！ おつ母さんのフ

エクリスタはあのワーシヤをどんなに可愛がつたか知れないんだ！ フェクリスタには、あの子に水の崇りがあるつてことは、蟲が知らした見える。夏なんか、ワーシヤと俺らおん、子供ら仲間で、小川さ水浴びに行つたりすると、おつ母さんは慄へ上つて氣を揉んだんだ。ほかのおつ母さんたちは何でもねえ、手桶もつてそのそばを往つたり來つたりして、えつちらおつちらしてるのに、フェクリスタは手桶をおろして、「お歸り、坊や、お歸り！ ああ、お歸りよ、いい子だから！」つて呼ばつてたんだ。一體、どうして水へ落つこちたんだか、誰も知らねえんだよ。川つぶちで遊んで、おつ母さんもその邊にゐて、乾草を臈おんき寄せたんだ。そして、ひよいと氣がつくと、誰か水の中で泡ふいてるやうな音がした。よく見ると、もう水の上にやワーシヤのしやつぽばかりが浮かんでるんだ。それからだよ、フェクリスタが氣が變になつちやつたのは。川つぶちへ行つては、ワーシヤの落つこちたところへ寢そべつて、歌うたつてるんだ。ほれ、ワーシヤがいつもあんな歌をうたつてたらう。あの歌をフェクリスタもうたひながら、泣いて、泣いて、神様にさんざん泣き言をいつてるんだ……」

「ああ、パウルーシヤがかへつて來た」とフェーヂヤが、いふ。
パウエルは水をいつぱいに入れた鍋をもつて、焚火のところへやつて來た。

「おい、みんなら」一寸のあひだ黙つてゐたが、やがて彼は言ひ出した、「變な事あつたぞ」

「何がよ？」コスチャが急き込んで訊ねる。

「ワーシヤの聲が聞えたんだ」みんなは一せいに身慄ひした。

「何だつて、おい、何だつて？」とコスチャが廻らぬ舌でいふ。

「ほんとだよ。おれが水汲まうと思つて、こごんだら、いきなりワーシヤの聲で、水の底から聞えてくるみたいに、『パウルーシヤ、パウルーシヤ、こつちへおいで』つて、かういつて呼ぶ聲が聞こえるんだ。おらあ、逃げて來た。でも、水だけは汲んで來たよ」

「ああ、どうしよう、どうしよう」と子供たちは十字を切りながら口々にいふ。

「パーウエル、そりや河童ワチャノイが呼んだんぢやないか」フェーヂヤがなほも言葉をつづける

……、

「こつちぢや丁度いま、あのワーシヤの話をしてたところだ」

「ああ、齧か起おこが悪い」とイリユーシヤが一句一句に間を置いていふ。

「なあに、大丈夫だよ、かまふもんか！」とパーウエルはきつぱり言ひ放つて、また腰をおろした、「どうせ運のがは免れらんねえんだもの」

子供たちは、静かになる。見たところ、パーウエルの言葉が子供たちに深い感銘を與へたらしい。子供たちは、いよいよ眠らうとでもしてゐるらしく、焚火の前に横になり始めた。

「あれは何だ？」と不意にコスチャが頭をもたげて訊いた。
パーウエルは耳をすました。

「あれは山嶋やましぎが鳴きながら飛んでるんだよ」

「どこへ飛んで行くんだらう？」

「向ふの、冬のねえつち所へよ」

「そんな國があんのか？」

「あるとも」

「遠くにか？」

「遠く、遠くの、暖あつたかい海のむかふだよ」
コスチャはほつと溜息をついて、眼をとぢた。

すでに私が子供たちのそばへ腰を下ろしてから三時間あまりになる。月はやうやく昇つて来たが、すぐには眼につかなかつた。あまりに小さな、細い月であつたから。この月の光のたよりのない夜は、前と同じやうに、すばらしい感じがした……。しかし、つい今しがたまで空高くかかつてゐた多くの星は、もはや暗い地の果てに傾いてゐた。あたりのものは何もかもが、常に夜の明け際にのみ見られるやうに、聲もなく静まりかへつてゐる。何もかもが深い静かな夜明け前の眠りに沈んでゐる。空氣のなかにはさして強い匂ひはなくなつてゐる。空氣にまたしても露じめりがあふれてゐるやうに思はれる……。夏の夜は永くはない！……子供達の話は焚火が消えると共に消えうせる。犬は微睡まどろみさへしてゐる。微かに明るい星あかりに透かして見ると、馬もまた頸を垂れて、やすんでゐた……。快い懈怠けたいがやつて来る。するうちに私も微睡まどろんでしまった。

爽かな微風が顔を吹き過ぎる。私は眼をあける——朝になりかかつてゐる。まだ曙の紅の色はどこにも射してゐないが、東の方はもう白みかかつてゐる。淡い灰色の空は明るく、冷たく、青味を帯びて来る。星は微かな光を放つて、瞬いたり消えたりしてゐる。地はしつとりとし、葉は濕り、どこかにいきいきした物音や聲が聞こえる。朝の小風はそよそよと地のうへを吹き渡る。私のからだは軽く、楽しくふるへて風に應へる。私はふと立ち上つて子供たちのところへ行つた。燻つてゐる焚火のまはりに、子供たちはみな死んだやうになつて、眠つてゐる。ひとりパーウエルが身を半ば起こして、じつと私をみつめる。

私は彼に會釋して、うち煙る川に沿つて家路についた。まだ二露^ろ里とは歩かないうちに、私のまはりの、廣い露にぬれた草原や、前の方の緑いろがかつた丘や、森から森、またうしろに長くつづく埃の道、赤らむ叢、薄らぐ霧のかけにおづおづと青味を帯びてゐる川に、――最初は鮮紅、次には赤と金との青々しい、燃えるやうな光が奔流のやうにふり注いだ……。何もかもが動き始め、眼をさまし、うたひ、そよぎ、話し始める。輝く金剛石のやうに大きな露しづくが、ここかしこに燃えあがる。私を迎へるかのやうに、澄んだ朗かな、恰も朝の涼氣に洗ひ清められたやうな、鐘のひびきが聞こえて來る。すると不意に、息をやすめてゐた馬の群れが、さつきの顔見知りの子供たちに追ひたてられて、私のわきをまつしぐらに駆けぬけて行つた……。

残念ながら、私はパーウエルがその年にあの世の人となつたことを付け加へなければならぬ。あの子は溺れ死んだのではなく、馬から落ちて死んだのである。惜しいことをした、すばらしい奴であつたのを！

■ 訳者中山省三郎氏による「註」（注記ページ表記を外し、私のテキスト注記に準じた表示法をとった）及びやぶちゃん注（私の注は新字・現代仮名遣とし、冒頭に「◎」を附して全体を「」で括った）

「◎『いきれる』：「熱る・蝕る」で、蒸れること。ロシア語原文は“тратить”とあり、これは確かに、蒸される、蒸れるの意であり、佐々木彰も「いきれる」を踏襲している。しかし、米川正夫はここを『陽炎』が立つことさへもある」と訳している。米川訳は分かりやすいが、湿度の高いむしむしした強烈な肌感覚は伝わってこない。やはり、この『いきれる』がよい。」

・ 梳櫛：腰帶に梳櫛を下げて持つて歩いてゐるなんぞは相當なハイカラである。

「◎伸方：和紙の紙漉作業で言うところの、「紙素叩き」^{かみそたた}・叩解^{こうかい}の工程作業を言うか。和紙にあつては、水中でほぐした楮の繊維の塊を木の台に上げ、搗粉木や木槌で叩いて伸す作業を言い、本邦でもこれは昔、子供の役目とされ、大変つらいものであつた。但し、佐々

木彰は、これを「艶出し^{つやだ}」と訳している。」

〔◎漉桁：「すきげた」と読む。和紙にあつては、持ち手のついた大きな木枠を言い、その中に簀（す）を挟んで、漉舟（すきぶね）から紙の原料液の入った水を汲み入れて漉く。米川・佐々木両氏は共に「濾し網」と訳す。どちらの訳がよいかは、ロシアの紙漉器機の形状を見たことがないので如何とも言い難い。〕

・パーウエル…これが正式の名前で、パウルーシヤは愛稱である。

・天井^{バラーチ}…露西亞の百姓家で、天井に近いところに設けてある寢床。

・「俺たちのは神様がついて下さる!」…魔除けの文句。

〔◎駅遞：「えきてい」と読み、「駅遞」に同じ。宿場町（駅）から宿場町へ荷物を送り届ける運送業者の店、若しくは郵便局を言う。〕

〔◎『羊、羊!』^{めえ}…米川正夫は「羊よ、羊よ」と訳し（最初のエルミール〔米川はエミールと表記する〕の台詞の方は「これ羊よ、羊よ」と「これ」が入る）、佐々木彰は「羊や、羊や!」^{ビヤシヤ ビヤシヤ}とルビを振るのであるが、ここはロシア語原文では「"Baia, Baia!"」^{ビヤシヤ}となっており、これはロシア語に暗い私の想像であるが、羊の鳴き声の擬音語と思われる。であれば、中山氏の訳がしっくりくると言ってもよい。ここは、決して超自然の怪異が起こることによる怖さではない。まがまがしい羊の眼のアップとその鋭い鳴き声のホラーであると私は思う。〕

・錠切草…御伽噺に出てくる毒草。その毒草を近づけると錠も門も断ち切れて寶ものが得られといふ。

・天の前兆…日蝕のことを私たちの土地の百姓はかういつてゐる。（作者の註）

〔◎トリーシカ：ロシア語原文では「Тришка」。昭和三三（一九五八）年岩波書店刊の佐々木彰訳では、ここに割注があり、作者ツルゲーネフの注として『トリーシカ』俗信には反

キリスト伝説の影響があるものと思われる〔原註〕が挿入されている。」

・水溜り…春の雪解の水がたまってゐる深い穴、夏もなほ水が残つてゐるところ。

・河童^{ワシヤウ}…民譚に出てくる川や淵にゐる極めて性惡な惡魔。